

第33回全国中学生人権作文コンテスト
法務大臣賞

※後藤泉稀さんが中学1年生の時に書いた作品です。

NO！と言える強い心をもつ

～ハンセン病問題から学んだこと～

1・金さん、絶対また来ます

瀬戸内海の小島にある岡山県の長島愛生園。そこに、金泰九（キム・テグ）さんという元ハンセン病患者の方が暮らしている。私の所属しているボランティアと人権・平和を研究するクラブは、金さんと17年間交流し、学習を続けている。私は先日初めて金さんとお会いし、交流させていただいた。

先輩方に「金さんってどんな人ですか」と質問したら、必ず同じ答えが返ってくる。「やさしくて、笑顔が素敵な人だよ。」実際、私も金さんの笑顔に包まれてとても幸せだった。でも、金さんの表情がきりっとすることもあった。「差別や偏見をなくすために私たちに望むことは何ですか。」その質問に、金さんはいつもこう答える。「正しく知って、正しく行動する。」これまで、社会の厳しい差別と偏見の中で生きてきた人の答えなのだと思う。

みんなが金さんの不思議な魔法にかけられたように、自然と笑顔を浮かべていた。「先輩方が言っていたことってこれのことなんだ。」私もいつの間にか、金さんのことが大好きになっていた。そして、金さんにまた会いたい！あたたかさに触れたい！と強く思った。

2・忘れない、あの時の痛み

「らい予防法。」それは金さんを含め、多くのハンセン病患者を苦しめた終生絶対隔離法。「ハンセン病になった。」それだけで家族やふるさとを奪われた。子どもは学校で、兄弟姉妹までもいじめられた。発病し、収容されると家族やふるさとに帰ることが許されないのだ。金さんは語る。「大阪に残してきた妻が亡くなっても帰してもらえなかった。それが一番辛かったなあ。」その時私の頭には、大好きな家族の顔が浮かんだ。どうして大事な家族と一生別れなければならなかったのか…。胸がぎゅっと苦しくなった。こんなにも苦しい思いをした人がいたことを私は知らなかったのだ。今、そのことを学習した私は、この過去を深く胸に刻み、忘れず、私たちが後世に伝えていかななくてはならないと決意した。

3・いじめSTOP～私がやるべきこと～

ハンセン病になった人は差別や偏見に痛み傷ついてきた。では、そんな人

は、現在いないのか。いや、今の時代にもあることだ。「いじめ。」これも許されない差別。私はいじめによって、自ら命を絶った人がいるというニュースを聞くにつけ、私にも無関係なことではないと思う。人を無視する、悪口を言う。これらがいつかいじめになり、人の命を奪ってしまうことにつながると思う。

私は周りに流される性格だ。やってはいけないと分かっているが、なかなか自分でストップをかけられない。しかし、このままだと私が人を傷つけてしまう。だから、自分にも友達にもNO！と言える真の勇気を持たなければならないと思う。ちょっとした悪口、間違った知識や行動が差別を生むのだから。

私は、そう考えてハンセン病問題を考えてみた。差別を広げたのは、「らい予防法」をつくった国が、「ハンセン病は恐ろしい病気。」と間違った宣伝をしたからだ。例えば、患者が歩いた後は、消毒で真っ白にする。それを見た人は「恐ろしい病気」と思ってしまう。周りの人は鼻をつまんで歩く。好きで病気になったわけではない。それなのに、犯罪者のように扱われた。こうして差別はつくられた。

しかし、私は、差別した責任は国だけではないと思う。市民が、国の間違った情報を信じ、自らに差別を宿したからだ。当時の人たちは、それに気がつくことなく差別を続けたから、あのような悲しい出来事が起きてしまったのだ。間違った情報はとても怖く、恐ろしい。また、社会の差別をなくすことはとても難しく、私一人では出来ないことだと思う。しかし、まず「自分から行動する」ということが大事だ。だから私はまず、いじめの入り口である人の悪口をなくすことから始める。

4・人と人をつなぐもの～私の決意～

私は小学校の時、先生に「人間が生きるために絶対に必要なもの」を教えられた。夢？希望？色々考えた。しかし先生は、「もっと大事なものだよ」と繰り返した。やっと先生の口から出てきた言葉。それはたった一字。「愛」だった。先生がこんな話をしてくれた。

「人はね、他者から愛をもらわないと生きていけないのだよ。」そうか…。私が今を生きられるのは、多くの人から愛をたくさんもらい、支えられているからなのだ。目には見えないけど、確かに愛をもらったという時は何かを感じる。ほっとしたあたたかい何かを。

そうか。金さんの部屋で、そこにいたみんなが笑顔になったのは、金さんの私たちへの愛があったからなのだろう。金さんが言っていた。「こうやって、みんなが会いに来てくれるから幸せだよ。」これが、金さんの愛だったに違いない。私も、金さんのように、たくさんの人と愛でつながる人間になりたいと思った。そのために、周りに流されず、自らの意思でNO！と言えるようになると決意した。

